九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ポンジュ詩学の虚軸としてのポーラン ：「言葉の力」の主題を中心に

太田, 晋介
大阪大学 ： 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/7162057

出版情報：Stella. 42, pp.351-376, 2023-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ポンジュ詩学の虚軸としてのポーラン*)
――「言葉の力」の主題を中心に――

太　田　晋　介

ポンジュにおける〈革命〉という問題系

フランシス・ポンジュの詩作の根源には，既成の秩序・体制に対する不信と反抗の念が存在する。処女詩集『十二の小品』に収められた詩群についての自評を思い出したい――「これらの作品は『三つの諷刺詩』と銘打たれています。この表題はそれなりの意味をもっています。なんと言えばよいでしょうか。当時の私は，そう，反抗のなかにいたのです。諷刺詩を書く人間が何かに賛同しない人間であることは明らかです」[1)]。ポンジュが初期諷刺詩で反逆を試みた具体相とは，資本主義社会とその支配者たるブルジョワ精神である。作品のなかで彼はこの現代世界の主役たちの習性――その「無気力（veulerie）」や「下劣さ（bassesse）」[2)] ――を嘲弄してやまない。他方，ダダの衝撃を受けた後のポンジュは，否定・反抗・挑発・憎悪などに依る詩概念の限界に敏感にならざるをえなかった世代の詩人でもある。『十二の小品』を編む過程で実際にネガティヴな詩の不毛性を確認した彼は，肯定的な詩の在り様（よう），すなわち「幸福に生きる理由」と「書く理由」が結び付いたような詩の探求へとほどなく向かう。こうしたポジティヴな詩の実現を彼は事物という主題のなかに見出したことは，今日よく知られている。

ポンジュ詩学における〈革命〉という問題系は，既成の秩序に対する反抗の念と，20 年代後半に見出された事物という主題が混ざりあった結果，着想されたものである。既存の秩序の解体と転覆を夢見る詩人は，事物に出会い，それが無数の未聞の特性を宿すこと，にも関わらず，言葉に支配された人間はそうした〈未知〉を明るみに出さず，放置したままでいることに気づいたのである。ゆえに，事物の特性を語り明かしたならば，ひとつの変革を引き起こせるだろう――「多くの感情は論拠がないために（社会的に）存在していない。よって，単純に物たちに専念するだけで，通常，人がそれに意味させているよりもはるかに多くのことを彼らに言わせることができる。さすれば，人間の感情に革命

を起こすことが可能だと私は判断する」[3)]。

ところで，20 年代においてポンジュのそれとよく似た革命を構想した存在がいる。シュルレアリストたちである。この 20 世紀最大の芸術運動の成立の背景にもまた，ポンジュの場合と同じく，第一次世界大戦を引き起こした（もしくはこの未曽有の災厄を引き起こしたにも関らず，旧態依然のままであり続けた）既成の秩序や道徳への反発心があったこと，並びに，ダダの精神を受け継ぎながらもその虚無主義には批判的だった彼らは，自らの非順応主義を単なる「否定」で終わらせずに，人間精神の解放を目指し行動したことは，彼らが律格と定めた「生を変えること」（ランボー），「世界を変容させること」（マルクス）のふたつの標語と併せてよく知られている。しかし周知のように，シュルレアリスム運動に対しては，20 年代のポンジュは距離を取ることを選択する。彼が運動に正式に加盟するのは，その栄光に翳りが見え始めた 29 年になってからであり，さらに加入から僅か 2 年後，彼はグループから離脱する。こう問うことは決して素朴ではあるまい――精神の革命という問題系を共有していたにも関わらず，いったいなぜポンジュとシュルレアリスムとの合流はかくも遅れ，かくも短命に終わってしまったのか。

ポンジュとシュルレアリストたちを分け隔てていた要素のひとつとして，両者の言語観の差異があげられる。若きポンジュのなかで，言葉とは，意味の働きとは別に，人間の諸感情や思考に影響を与える実効力を持つと信じられていた。彼の言う〈革命〉とはそうした言語の持つ力を下敷きにしている。ゆえに，詩人にとっては，文学・詩こそが〈革命〉の唯一にして真正の場となる――「真なる革命は書かれたもののなか，文学のなかで生じるものです。なぜか。私たちは言語のなかにいるからです」[4)]。ブルトンたちは，言葉のなかにそうした思考に与える影響力を見なかったわけではない[5)]。しかし，語の力を自らの革命に組み込むという発想は，〈文学〉や〈作品〉の価値を疑う彼らには希薄だったと言える。こうした価値観の違いを感じ取ったがために，20 年代のポンジュはシュルレアリストたちから一定の距離を置いたのである。

ポンジュの〈政治〉の中枢を占め，彼とシュルレアリストたちとを分け隔てた根本要因と目される，言葉には，意味とは別に，人間の意識や行動に強く働きかける力がある，という言語観を，以下の行論では「言葉の力（pouvoir des mots）」と呼びたい。ポンジュのなかでこの理念が形成されるにあたって特権

的な役割を果たした存在がいる。前稿で筆者がポンジュ詩学に与えた影響の深さと拡がりを論じたジャン・ポーランである[6)]。前稿では一風変わった比喩観の提唱者としてのポーランの顔に光を当てたが，周知のように彼はその著作のなかで「言葉の力」の問題を早くから取り上げ，それについて独創的かつ強靭な思考を展開した言語思想家としての顔も持っている。ポンジュは彼から「言葉の力」について学ぶことで，シュルレアリスム美学に回収されない独自の詩学と革命思想を練り上げたのである。

いま示した図式は，時代によって大きな様変わりを見せるポーラン，ポンジュそしてシュルレアリストたち，3 者の関係とその動態を捉えるに当たって有効であるように思われる。ただし，これはやや単純化した図式であることを断らねばならない。すなわちポンジュとポーラン，ふたりの著作を読み込むと，それぞれが「言葉の力」という表現で含意するものは，本質的に異なるものであることが判明するのである。ポーランはこの理念を虚構的なものと捉え，その仮象性を明らかにしようとする。対照的に，ポンジュは「言葉の力」の実在そのものについては疑いを持たず，この理念に独自の修正を加えることで彼の革命の詩学に組み込もうとする。「言葉の力」をめぐる認識の齟齬は当人たちの間では長らく認識されなかった。その結果，ポンジュ詩学は，シュルレアリスム思想にもポーラン思想にも還元されえない独自性を持つに至ったのである。以下では，ポンジュがポーランの言語思想をどのように摂取し，そしてどのような創造的誤読を犯したのかについて，一次文献の読解を通して考察してみたい。そうすることで，詩学「物の味方」の成立に当たってポーランが果たした特殊な役割，思想の虚軸性が明らかとなるだろう。

ポーランにおける「言葉の力」の思想――『海賊ジャコブ・カウ』解題の試み

ポーランにおける「言葉の力」の理念の解明から始めたい。そのためには 1921 年刊の小冊子『海賊ジャコブ・カウあるいは語とは記号であるか』[7)]（以下，『海賊ジャコブ・カウ』と略記）の第 1 部が重要な足がかりとなる。本書では，言葉が人間の思考，行動にどのように影響を及ぼすのかについてが論じられている（ただし「言葉の力（pouvoir des mots）」という術語は同作では用いられていない）。ポンジュは 1983 年の対談のなかで，思想・文体の両面で，この書に深い感銘を受けたことを認めている。この小著がポンジュにとっての「言

葉の力」の主要な着想源のひとつであることは明らかだ。問題は，詩人自身が「濃密で謎めいた」[8] と形容するこの書の内容と文体が，彼の中で正しく理解されたのか，ということである。

『海賊ジャコブ・カウ』の読者の多くが躓くのが，そこに現れる「記号（シーニュ）」なる語の解釈である。「言葉とは記号であるか」と副題で問われているが，この問いをもって著者は具体的にいかなる命題を考えているか？ 言葉とは古来より，人間の思考を表現し模倣するものであると捉えられがちである。例えば，17 世紀の学者は次のように書く――「ひとつの言語（ラング）とは一定数の人間が，言葉（パロール）によって互いの考えを表現することに無意識に合意した方法に外ならない」[9]。19 世紀の言語学者アルセーヌ・ダルメステテールにおいてはより端的にこう書かかれる――「精神は思考の代替物として言葉を用いる」[10]。「海賊ジャコブ・カウ」においてポーランが「記号」という語を用いながら検討を試みるのは，言葉をこのように人間の思考の投影として見る言語観の是非についてである。一般に正命題として受けいれられているこの態度は彼には非常に疑わしいものに思われる。彼は言う――たしかに，「言葉は私たちのそれを使おうとする配慮（souci）と緊密に結びついており，どこから配慮が始まり，どこで言葉が終わるのかについて，うまく見定められはしない」［*JC*, 207］，と。しかし，彼はすぐ様こう続ける――「単語から文章へ（du mot à la phrase），文章から話へと（de la phrase au récit）いたる間に明白な違いや溝は存在しない」［*idem*］，と。すなわち言語がいつ，どの段階で思考に置き換わるのかを人は精確に見極めることができないのである。にも関わらず，多くの人々は，「言葉の切れ端」を「思考の切れ端」として［*JC*, 212］，つまり語を言語の基本単位と無意識に捉えてしまっている[11]。ここからひとつの疑念，「言葉（語）とは記号であるか」という問いが出来する。作品内では一種の背理法，すなわち，言葉を「記号」と想定したがために，人間が犯す種々の誤りや認識の混乱が描かれることで，元の命題が誤りであることが導かれている。

ポーランが実際に引く事例を検討しよう。ある日刊紙が以下のような文章から始まる広告を誌面に掲載した――

全ての「未来」の読者に砂糖 5 キロ

この文言を読む者はほぼ確実に「近い将来，砂糖 5 キロが，自分をふくめた新

聞読者たちに配られる」といった意味で了解するだろう。しかしその想定は誤りである。この文章は実は，日刊紙の定期購割がもたらす値引きを語ったものにすぎない。そのことが後に続く「証明（démonstration）」と題された文章内で語られる――すなわち，定期購読の費用は年間 25 フランであり，それは新聞を一年間，通常購入した場合より 11 フラン安くつく。ところで，パリの物価において砂糖はキロ当たり 2.2 フランである。よって，これから日刊紙の年間購読を申し込む読者であれば，彼は砂糖 5 キロを「タダ同然で（*pour rien*）」で貰ったようなものである，云々。重要な点は，「読者」という語がここでは，この文章や新聞の読み手を指すのではなく，「案内文を読み，予約購読をこれから始める読者」という限定的な意味を持たせられているということである。仮に言葉が「記号」であるならば，読み手は，書き手と同様の意味でこの語を了解しなくてはならない。そんなことはまず起こらない。よって，この広告文は，言葉が人間の思考の等価物ではないこと，つまり「記号」でないことをまさしく「証明」しているのである。

我々の認識の誤りを確認した上で，ポーランは，問題となっている文言が持つ広告としての機能に目を向ける。彼によれば，文章が広告として機能するならば，それは先の「証明」で説明された値引きが魅力的だからでは決してない。そうではなく，「全ての『未来』の読者に砂糖 5 キロ」というこの言表それ自体が一種の「力」を持つからであるという。それはどのような「力」なのか。彼の言葉ではこう語られる――

> 悪意なく観察するならば，人は広告の力（vertu）を感じるだろう。この広告は一方では，私たちを読み違えの巻き添えにするが，それより先に，どんな読者であっても（たとえば私たちが自由にできる読者たち，すなわち私たち自身）に砂糖をタダで獲得するよう誘うのだ。つまり広告を本当にすることを勧めるのである。［*JP*, 209］

引用内では，先の「証明」を読み，自身の思惑から外れることが語られていることを悟った者たちが続いて抱く心情についてが語られている。彼らは一杯食わされたと思うだろうが，それ以上に，彼らが犯してしまった誤読を真実にすべく行動する衝動に駆られる，とポーランは主張する。一見すると，言葉自体が持っている「力」を肯定しているように読み取られるが，おそらくそうではない。前後の文脈に鑑みるに，ここでは「記号」という言語観が人間の思考に

与える影響力が言われていると取るべきだろう。すなわち，言葉が思考の等価物,「記号」であるという考えは我々の精神にきわめて深く根付いているがために，我々はその状態になっていない言葉を目撃したとき，己の思考・認識を捻じ曲げてでも,「記号」の状態を復元しようとする意思に襲われるのだ，とポーランは語っているのである。そのことは，次ような読者の誤読を誘う文章を以てより端的に示されている――「まるで言葉が記号ではないかのようである。それを助けなければならない」[*JP*, 209]。

「記号」という観念が人間精神に及ぼす影響力については，小冊子「海賊ジャコブ・カウ」の題名の元となったエピソード内でより顕在的に語られているので，その内容を紹介しておこう――。航海中，ひとりの男が海賊に捕まった。このとき海賊たちは乗船していた者たちを甲板に整列させ，虜囚となった彼らに名前を名乗らせた。ひとりの水夫が「ジャック・ディック」と名乗ると，海賊たちは即座にこの男を海に放り込んだ。それを見た男は機転を利かせ，本名の「マック・オルラン」ではなく海賊の頭の名である「ジャコブ・カウ」と名乗った。すると海賊たちはこの名の喚起する恐怖に怯え，当の首領をはじめ蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。海賊たちが逃げ出したのは，言葉（この場合,「ジャコブ・カウ」という名）を誤って現実の存在と結びつけてしまったからである。換言すると，彼らは「人物とそれを指す名前，あるいは語とそれが指示する対象を区別することができなかった」[12] のである。明らかに，このように描かれる海賊たちとは，現実認識を捻じ曲げてでも言葉を「記号」として捉えようとする性向を持った我々，人間精神の戯画に外ならない。事実，本エピソードが語られた数行先でポーランは次のように続ける――

> ジャコブ・カウがその都度，逃げ出さねばならないように私たちもまた語に対して振舞っているのである。〔…〕それは常に脅かされながらも，常に保たれている奇妙な欲求である。次のように信じねばならない，もし語が記号，それも事象そのものと混同されるほどの完璧な記号であることを一瞬でも止めてしまったならば，私たちはもはや話すことに耐えられなくなってしまうだろう，と。[*JC*, 212]

『海賊ジャコブ・カウ』においてはこのように，言葉を「記号」であると信じ込んでしまった結果，この誤った言語観によって思考や認識さらには行動までもが歪められてしまう人間の姿が誇大的に描かれている。ならばポーランが「言葉の力」という表現を用いる際も，同様の錯覚のことが言われているのだろう

か？ そう捉えたくもなる。だがポーランにおける「言葉の力」の理念はいま少し複雑である。すなわち，それは，「言語へのおべっか」と題された『海賊ジャコブ・カウ』の最終章節で語られている，対話構造の非対称性の問題にも接続すべきものであるように思われる。

結論部としておかれた本章節では，それまでとは打って変わって，その意味が不透明な言表，すなわち即座に「記号」として認識されないような言葉の使用時に，「記号」という言語観が人間意識にどう働くのかについてが語られている――物事を支離滅裂に話し，しばしば言い間違いをも犯してしまう話し手がいる。聴衆は当然，彼が何を言っているのかさっぱり理解できない。ある者は「彼が言いたかったのは本当にこの語（*ce mot*）なのか？」と問い，別の者は「よく理解できません」と目の前の彼に不平を零す。聞き手のこうした反応を目にしながらも，話し手は語ることをやめはしない。彼は聴衆に向かってこう呼びかける，「私の言葉（*mes paroles*）をもっとよく理解してください」，と。

自身の言葉が相手に理解されていないことを知りながらも話者が話すことをやめないとすれば，それは，彼のなかでは己の語る言葉が思考の等価物，すなわち「記号」と見なされているからである。かかる状況下において，この言語観は二重に話者の考えを歪ませているとポーランは指摘する。「記号という考え（idée du signe）」は，第一に，「言葉とは，なんだかんだ言って――たとえ期待を裏切ったばかりのものであっても――何らかの思考を含意するものであり，それらは語の意味を新たに拵える」［*JC*, 214］と彼らに信じ込ませる。しかし意味が定かでないような語の集まりからさえも，何らかの思念や考えが取り出せると信じる者たちにとって，語とそれが宿す意味（sens）に一体どのような役割・価値があるだろうか？ 彼らにとっては，それらはせいぜい自身の思考の「上辺（apparence）」にすぎぬものになろう。その結果生じるのが，言語への不信と不満の念，つまり言葉とは「危険あるいは邪魔な」ものであるという考え，別言すると，「人々が話し，自らを表すのは，言葉によってではなくそれに逆らってである」［*idem*］という感覚である。これを約（つづ）めると，言語を「記号」と捉える者たちは，自身の考えが言葉によって上手く伝わらない場合，言語の欠陥・弱さに責任をなすりつけてしまうのである。『海賊ジャコブ・カウ』第1部の掉尾では，こうした誤った言語思想に導かれ，言語がもつ「意味」に完全に目を塞いでしまった人間たちが取り交わすコミュニケーションの歪さが誇張

されて描かれている。

このエピソードのなかにポーラン的な「言葉の力」の理念の萌芽が読み取れる。そこでは，対話において言葉を記号とみる者（話し手）とそう取らない者（聴衆）との間に生じる認識のずれ，そして，このずれが顕在化したとき前者の裡に抱かれる心情が克明に描かれていた。問題は，後者が前者を観察するとき，どのような心理が生じるか，という点である。前者の言葉は，彼らには何の変哲もない辞書的意味だけを運ぶ「語」にしか聞こえていないのだから，言葉のなかに，それ以上の何かを読み取ることを求める者たちの姿は，彼らの目には，語に一切の主導権を譲り渡し，それが持つ魔術的な喚起力に訴えかけようとしているように映ってしまうに相違ない。かかる話者間の言語をめぐる認識の非対称から生じる錯覚こそが，ポーランが「言葉の力」と表現するものの正体である。彼のなかで「言葉の力」とは，話者単独ではその存在を感じ取ることはできず，他者の言説のなかにのみその存在が確認される，いわば幽霊や蜃気楼にも似たものとして捉えられているのである。彼が主著『タルブの花』で「言葉の力」を問題とするとき，もっぱら他の作家や批評家たちの言説ばかりを参照し議論を組み立てていること，ならびにこの理念を架空存在である「セイレン」や「ミノタウロス」[13] に準えていることなどが，その点を明確に証言しているだろう[14]。

父アルマンからポーランへ，「意味論」から「言葉の力」へ

文体・内容ともに曲折がみられるポーランの『海賊ジャコブ・カウ』をポンジュはどのように受容したのだろうか。この点を考えるためには，詩人と批評家が出会うに当たって，特権的な役割を果たした第三者がいたことを想起する必要がある。詩人の実父アルマン・ポンジュである。ポーランと出会う以前のポンジュは，彼こそを自身の最良の理解者，精神の導き手として深く敬慕していた。1922 年，父は息子フランシスが群小雑誌『白い羊』に寄せた作品に対する短文評が『新フランス評論』に掲載されていることを発見し，息子にこの論者に連絡を取ることを勧める。息子は詩篇を添えた書状を送り，その結果，彼は当時グルネル通りにあった『新フランス評論』誌の編集局に招かれる。歓待の後，詩人はひとりの編集者に見送られ，別れ際に刊行されたばかりの『海賊ジャコブ・カウ』を手渡される。詩人がこの著作から深い霊感を授かったこと

は先に述べた通り。ふたりの出会いの数カ月後，アルマンは腸チフスにより急逝する。それ以降，ポンジュは父に替わって，この編集者を精神の導き手と仰ぐことで己の詩学を練り上げていくことになる。ジェラール・ファラスはかかる人間模様を評してこう書いている――「アルマン・ポンジュは，彼の後を継ぎ，息子の野心の実現を助けることができる人物を指さしながら選定した。彼はポーランを息子の代父に択び，聖別したのである」[15]。

これらの伝記的事実は逸話的な意味しか持たぬと判断すべきだろうか。我々にはふたりの間の「言葉の力」の理念の伝達にあたって，実父の介在は本質的な意味を持つように思われる。というのも，ポーランに先立ち「導師」と見なされていたこの父親は，言語についても省察を行い，それを息子に説いていたからだ。父は息子にどのような言語についての知恵を授けたか？ 親子の往復書簡を手引きに検討・考察しよう――

> 意味論（セマンティック）という新しい学問に好奇心を抱くものたちは，それに基づいた新しい芸術が現れたことを示すこの詩的エッセイに関心を抱くだろう。
>
> 詩とは何か？
>
> それは，人間の正確で科学的な言葉，つまり日常生活や知性の営みで使われる言葉と，人間がそこから派生した祖先の種において，考えや感情を表現するために役立っていた言語である音調の屈折で構成される感情的で自然な言葉とを結びつけようとする芸術のことである。[16]

ここでアルマン・ポンジュは，息子から送られた習作の詩を講評している。その際，彼は「意味論」と呼ばれる新興の学問を引き合いに出す。当時にあって「意味論」とはいかなる学問領野を指す語であったか。この点については，同じ術語を表題に冠したミシェル・ブレアルの著作を論評したヴァレリーの言葉を引こう――

> 『意味論』は，語には意味があることをあらためて思い起こさせてくれるのであって，語はふたつの要素，ひとつは物質的な要素，他方は精神的な要素が結合したものだ。前者の研究はずいぶん古くから行われてきたが，後者の研究はじつに進んでおらず，両者の結合全体の研究は存在さえしないが，これこそ重要な研究のはずである。『意味論』はこの全体にたちもどるのだ。[17]

ヴァレリーに従うならば，「意味論」とは，言語の記号的な面と物質的な面，そ

れぞれが意味を有することを認める立場をとり，ふたつの相互的連関を考量しつつ，一単語の持つ総合的な意味を解明する学問の謂いとなる。上に引用した書簡から窺えるのは，ポンジュの実父アルマンがヴァレリーと同様に「意味論」の本質を捉えていたということ，ならびに，彼がこの学問の真髄を詩性・ポエジーの理念に結びつけていた，ということである。それは，ポーランに出会う前からポンジュが，「言葉とは記号ではない」という命題が学術的に正しいこと，そして言葉の持つ非記号的側面をあらわす文章こそが「詩」であると教えられていた，と言い換えられる。ならば，副題において「言葉とは記号であるか」と問うポーランの『海賊ジャコブ・カウ』もまた，この父から伝えられた「意味論」的な目線のもとに理解されたのではあるまいか。すなわち言葉を観察したひとつの学術著作として。

こういった考え方は複数の資料によってその裏付けが得られる。そのひとつ，「ボードレール――異本の教訓」と題された作品に目を向けたい。父の死の直後に草された読書メモに分類されるこの文章は，1920 年代のポンジュの文学観・言語観，さらには彼における父性的権威の主題をも物語る重要資料である。本稿の問題設定に沿って，その概要を示すと以下の通り――当該作品は，父の葬儀の夜，息子がその書斎に立ち入り，机の上に開かれたまま置かれた『悪の華』を発見することから始まる。クレス社から出版されたこの詩集は決定稿とあわせて序文草稿や初出形態（ブレオリジナル）などを併録する学術的な校訂本であった。亡き父の遺言であるかのようなこの詩集を息子は繙き，そこに見られるボードレールの現代的な美意識に深い感銘を受ける。具体的に彼の心を打ったのは，詩篇 17 番「理想」の内部に見られる書き換えの作業である。古典主義的な不動の美を斥け，ロマン主義的な異形の美を称える同詩篇の最終聯は雑誌発表時，次のように書かれていた（強調は引用者）――

Ou bien toi, grande Nuit, fille de Michel-Ange,
Qui *dors* paisiblement dans une pose étrange
Et tes appas taillés aux bouches des Titans !
さもなければお前，ミケランジェロの娘たる偉大な**夜**
奇怪なポーズでおだやかに眠るもの，
そして巨人族の口に合うように彫られたお前の胸元！

これらの詩行は 1857 年『悪の華』初版ではこう書き改められる――

Ou bien toi, grande Nuit, fille de Michel-Ange,
Qui *tors* paisiblement dans une pose étrange
Et tes appas taillés aux bouches des Titans !
さもなければお前，ミケランジェロの娘たる偉大な夜
巨人族の口に合うように彫られたお前の胸元を
奇怪なポーズでおだやかにくねらせるものよ！

決定稿と異本を比較すると，ボードレールが動詞 «dormir» ではなく «tordre» の方を好み，ふたつを入れ替えた結果，付随して様々な異同が連鎖的に生じたことが読み取れる。すなわち，自動詞 «dors» から他動詞 «tors» に切り替わった結果，名詞 «appas» は動詞の目的語となる。一音節の接続詞 et が取り除かれ，これにともない，音綴数の要求から «taillé» から «façonnés» へと修飾語が変化した，等々[18]。

このような些細・微小とも思われる書き換えにポンジュが強く心打たれたのは，そこに意味や思想に対する語＝物質の優位を見たからに外なるまい。すなわち，『悪の華』の詩人が «dors» よりも «tors» の方を好んだのは，明らかに２つの動詞の意味の違いなどではなかった。彼が何よりも優先したのは，ｄ子音とｔ子音のあいだの美的優劣や，文字のかたちといった詩の形式に関わる諸要素，言葉の物質的側面だったのである。しかし，そのような語自体への配慮と干渉は，最終的には詩句の意味や思想と呼びうるものさえをも大きく揺り動かしてしまう。この逆説的とも言える事実の発見・認識に興奮した青年詩人は次のように走り書く――

> 意味は変わる。全ては一語によって変わる。これは些細なことではない。そうでなくてはならない。一本の線が全てを修正し，変えてしまう。必要ならば詩題さえも。これぞまさしく芸術家の仕事だ。[19]

父の書斎に残された『悪の華』によって，ポンジュは言語が記号ではないこと，その物質性が人間の思考に影響を与えることを確信したのである。こうした実体験に照らし合わされながら，ポーランの『海賊ジャコブ・カウ』は受容されたのではあるまいか。たとえば，デュカス『ポエジー』に見られる箴言の書き換えの詩学を論じた次のポーランの文章などは，単独で取り出されたならば，「意味論」の命題（言葉の物質性に内在するもうひとつの意味）を扱ったものとして読まれたとしても何ら不思議ではない――「文章〔…〕と観念は同じ生地

でできている。それゆえ意味を逆転させるためには，単語の順序を逆さまにするだけで十分なのだ」[*JC*, 211]。

ポンジュが『海賊ジャコブ・カウ』の読解を試みたとき，「意味論」という父から伝達された言語思想が自然とその解釈に滑り込んだものと思われる[20)]。こうした「誤読」が詩人のなかで気づかれぬままであったとすれば，まずはポーランの著作の晦冥さとその論述の屈曲のなかにその原因が求められるべきだろう。しかしこの点については，若きポンジュが言語の問題に苦しんでいたこともまた大きな要因であったように思われる。すでに見たように，『海賊ジャコブ・カウ』のなかでポーランは，言葉の裡に弱点や欠陥を見てしまう人間の心理と，そうした認識をもたらす根本を暴いていた。自身もまた青年期より言語に対し強い不信の念を抱いていたポンジュは，そうしたポーランの記述のなかに，己(おの)が魂の最良の理解者の姿を見て取り，共感の念が先走りした結果，同書の理解が少しばかり曇ってしまったのではあるまいか[21)]。

いずれにせよ，20 年代前半のポンジュが，彼に霊感を吹き込んだポーラン本人よりもはるかに素朴に「言葉の力」の実在を信じていたことは疑いない。若き詩人の詩学の発展自体がその点を雄弁に物語っている。とりわけ彼が言葉の意味を削減し，代わってその物質性を強調することでひとつの「詩」を取り出そうとするとき，彼の「言葉の力」への傾倒はとりわけ顕著である。具体的には「言葉の寓話（fable logique）」と題された作品群がそれに該当する。詩人が後年述懐するように[22)]，これらの詩篇のなかでは，言葉が持つ意味から意図的に目を逸らし，個々の単語や文法事項から導かれる想念・イマージュを描くことが目指されている。別言すれば，ここでは語をその意味から可能なかぎり「切り離し」，それによって濾過・抽出された言葉が，人間の思考や感性に与える影響を明らかにすることが試みられているのである。かかる詩学には，ポンジュにおけるポーラン受容の錯綜が読み取られよう。話者の思考と言葉の意味とを「切り離す」ことの困難を説いたポーランの言葉を「意味論」的目線から曲解し，言葉の記号的意味と物質性とを「切り離す」方向へと向かったのである――「（《切り離して言葉について語ることは難しい》，ポーランはそう書いている）／じじつ，今ここに目に見え，聞こえる「物体」〔＝言葉〕がある。しかしそれは触れられず，空間的三次元性も，重さも，影も持たないのだ」[23)]。また，「その精神，その範疇，その推論，その想像力を言葉に適用すること，そして最終的

には言葉について《切り離して》語ること，それはすでに見事な勝利，解放行為ではなかろうか」[24]。

いっぽう 20 年代のポンジュは，こうした「言葉の力」そのものの表出から詩性を取り出す詩業と並行して，それへの反逆から詩を成立させることも試みている。当時の詩人にとって，語とはポーランが言ったように「危険あるいは邪魔な」もの，話者の意志を無視して勝手におしゃべりするものと捉えられていた。それゆえ人は，通常の文章を書くだけでは，己の内面性，〈思考〉の完全な表現には到底至りえない。ここから言葉に「逆らって」書くことの必要性，その美的価値が出来（しゅったい）する。ポンジュが「修辞（レトリック）」と名付ける芸術文体の根幹にある発想とは，そうした言葉の振るう暴力に対して「文体（style）」（その語源は «stilus» すなわち武具や筆具の「突端，切先」）という別の暴力を対置させるという考え方である。語句とその配置が徹底的に選び抜かれ，比喩を始めとする文体技巧が極限まで駆使された文章を書くことで，若き詩人は「偶然の不意を突く己以外の者たちの言葉を覆い尽くし」[25]，そうすることで「自らの言いたいことだけを言う」[26] という難題の達成を図ったのである [27]。

革命詩学「物の味方」における言葉の役割と価値

前節では，父とポーラン，少なくと両者の言説に引き寄せられる形で「言葉の力」の理念が解釈されたこと，ならびに，結果できあがった独自の「言葉の力」の思想が若きポンジュの詩学を牽引していたことを観察した。彼が 20 年代中頃に〈もの・事物〉との邂逅を果たし，その体験を元にした詩学を構想する過程で，この理念はさらに拡大して解釈されることになる。その模様を追跡・観察するために，ポンジュが「前詩」と名付けた，詩であると同時に詩論であるような作品群から 2 篇を読んでみたい。まずは 1928 年に書かれた「素朴な資源」から——

> 観想する精神は，事物たち［choses］（それは虚無［*riens*］に外ならぬものだ）の内部に沈み込む。そこで彼は，彼に代わって彼らがそれを差し出したかのような，特性を名付けることで自らを生み直す。
>
> 私が自身の幸福を結びつけるのは，私の偽りの人格の外にある物たち（objets），好機にある事物たち（choses du temps）に対してであり，彼らに投げかける注意の意識が，私の精神のなかで，特性つまり彼ら独自の振る舞い方の集成物として，彼らを形成するときにおいてである。そうして見出された彼らの振る舞いは，彼らを前にし

た私たちの振る舞いとは何ら関わりも持たないものであり，全く予期せぬものなのだ。ああ美徳たち，ああ突然の可能な模範たちよ（ô modèles possibles-tout-à-coup），私がこれから発見し，その内部で精神が新しく機能しながら自らを崇拝する場よ。[28]

「もの」を意味するラテン語 «res» を語源に持つ「虚無（riens）」という語の採用が示すように，ここでは，「大洪水より遥か前に遡る」[29] こと，すなわち命名される前の状態で事物をまなざすことが問題となっている。作品では，そうした無垢なる視線が事物に注がれたとき，言葉・思考・事物，その各々がどのように共鳴しあうのかについてが語られている。事物を観想する精神はまずそこに「全く予期せぬ」もの，〈未知〉を発見する。精神はこの〈未知〉に「注意」を注ぎ，名を与えるのだが，その過程で次第に，「事物」に注がれた注意が「特性」へと変じることが語られている。私＝主体の外にある事物・ものが「差し出した」かのようなこの特性を取り込むことで，人間精神はそれ以前とは別のものに自らを「生み直す」のである。かくのごとく遂行される事物と精神の融合こそが，ポンジュがめざす精神の革命の骨子である。それゆえ彼にとって「生を変える」ためには，ランボーが言い，そして実際に行ったように，彼方へと「出発する」必要はない。我々のすぐ側にある「無数の未聞の特性」を秘した「宝物庫」のような事物たち，それらを注意深く観察するだけでよいのである[30]。

こういった説明に対して，事物に内包される〈未知〉を観察し，それを精神に取り込むことが目的であるのならば，必ずしもそれを名付ける必要はないのではないか，と訝しむ向きもあろう。これに対する返答としては，詩学「物の味方」とは，〈革命〉の主題と並行して「幸福に生きる」という〈生〉の主題が引き受けられた詩学であったことをいま一度強調しておきたい。先述のごとく，当時のポンジュはポーランの言う「言葉の力」の実在を強く信じた結果，自身が考えるのではなく言葉によって考えさせられている，といった類の迫害の念に強く苛まれていた。事物の命名の詩学を実践することで，こうした倒錯的な言語観からの脱却が図られているのである。すなわち，まだ彼以外の誰にも見出されていない事物の未知なる側面を発見したとき，その瞬間においては，精神の裡には思念だけが存在し，一切の言葉は存在していない。かかる状態のなかで言葉を事物の方へと向かわせたならば，人は，言葉の他動詞的側面，それが目の前にある名を持たぬものを名指すための道具である，という素朴な認識を取り戻すに違いない，若き詩人はそう信じたのである[31]。

しかしながら，事物を精神に取り込むにあたって「命名」が必須の手続きであるとすれば，それは言葉が事物に及ぼすひとつの力について固く信じられているためでもあるだろう。この点にかんし好個の資料となるのが，1929 年に執筆された別の前詩「言葉による事物の修正」である。興味深い詩題を付されたこの作品では，「素朴な資源」で語られていた内容が別の視角から語り直されている。詩篇はひとつの物理現象の記述から始められる――「その周辺の影響を認識した後に，冷気と名付けられたものが液体（onde）へと入り込む。氷がそれに代位する（à quoi la glace se subroge）」[32]。こうした記述は，目に見えず，形や質量も持たないものが外界の事物に入り込むと，後者に決定的な変化が生じることを述べるためになされている。「冷気」と同様に，「視線」や「言葉」が事物のなかに「入り込む」ことで引き起こされる変化が続けて以下のように語られる――

> 同様に視線もまた，突如として新たな延長（étendue）に順応する。その順応は注意力と名付けられた運動の総体によって行われるのだが，それによって新たな対象が固定され固まるのである。〔…〕
>
> 同様に待機，調整，さらには同じ注意力のもたらす効果によって，波（onde）すなわち形と呼ばれるものの中身を満たしているもの，少なくともそれと結びつくもの，ある水準においてそれを形づくるものなかに，その修正をもたらすことになるものが入り込むことがある。すなわち言葉（パロール）である。
>
> したがって言葉とは，精神にとりこまれた事物にとっては，彼らの厳格さ＝凝固（rigueur）の状態，事物たちが自らの器の外から突き出た状態なのだろう。[33]

プレイアッド版『全集』の編者のひとりミシェル・コローが指摘するように[34]，詩人はここで «rigueur» という語を，語源的意味である「冷えて固まった」という意味を念頭におき用いている。このことが示唆するように，ポンジュは作品内で，気体・液体・固体という三相の変化に引き寄せながら，自身の固有の世界認識について語る。すなわち彼にとって事物・ものとは，そのままの状態では存在がほとんど感知されない〈気体〉に似たものとして理解されているのである。そうしたデカルト的「延長」として空間内に散漫に存在する事物に「視線＝注意力」が注がれると，その様相に最初の変化が生じる。精神と関わりをもたない物体＝延長であることを止め，観察者の主観が入り混じった「対象」へと変じるのである。しかし詩人の目線においてこの状態は，様々な性質がそ

こに見出される曖昧な状態，別言すれば，〈液体〉に似てその在り様が刻一刻と変わる不安定な状態として捉えられている。そうした「対象＝オブジェ」に固体的特性すなわち「かたち」を与えるのが「言葉」である。「言葉」というこの衣服を身に纏うことで，対象・オブジェは自らの特性をひとつに定め，精神の内部により安定した形で定着することが可能となるのである[35]。

1929年の前詩で語られるこうしたポンジュの特異な世界認識・言語観はそれ単独で見ても興味深い。他方，こうした詩人の認識のスケッチを掴むことは，彼の革命観を正しく理解する上でも有用であるだろう。言葉が「入り込む」ことで事物の様相が様変わりし，それ以前よりも安定した状態で精神に根付くというのであれば，それはとりもなおさず，人間が精神の革命を効果的に実行するためには「詩」，それも事物と強く結びついた言葉を必ず介さねばならない，ということを意味してはいないだろうか。

以上，「素朴な資源」と「言葉による事物の修正」，相互に補完し共鳴しあう２つの前詩を読むことで，「もの」との出会いを果たした後のポンジュが，言葉を事物の様相に決定的な変更を加えるものとして捉えていることを確認した。では，本節で確認したような詩人独特の世界認識・言語観は，ポーランの言語思想とは無関係に着想されたものなのだろうか。否，そう考えるべきではない。20年代終盤に両者の書簡で交わされた「言葉の力」をめぐる議論を検討することで，実証的な裏付けが得られるであろう。

２つの言語の政治とその並行

1930年前後はフランス文学の転換期として知られている。『小説の危機』で名高いミシェル・レーモンはこの転換について次のように書いている――「《下らない議論に明け暮れた》現実から切り離された文学が，何はなくとも《人間の悲劇的状況》を再発見し，現代世界の諸問題について密かに思考する文学にその席を譲りつつあった」[36]。このように20年代初頭までは，観念や美の表現こそが文学の本質であり，それは現実から独立していなければならない，という信念・価値観が文壇で主流であった。しかし20年代半ばからは，そうした〈自律〉の文学は次第に求心力を失い，代わって正反対の文学，現実や社会問題に積極的にコミットする文学が若い世代を中心に急速に台頭してきたのである。

ジュリアン・バンダが『知識人（司祭たち）の裏切り』で警鐘を鳴らしたこ

とでも知られるこうした文学観のパラダイム・シフト，「30 年代精神」[37] の文学傾向について，なぜここで確認したかというと，同様の図式が当時のポーランとポンジュの関係を把握するに当たっても有効だからである。ポーランは文学の自律を尊ぶ旧世代の作家に，ポンジュは文学が行動と連関することを切望する新世代の作家に属する。当時ふたりの間で交わされた往復書簡を繙けば，マルローやパスカル・ピアに同調しながら，自身の詩が単なる文学以上のもの，行動や革命の引き金となることを欲し，『新フランス評論』誌に対してもそのような文学への理解と接近を求めるポンジュの姿と，文学が特定の政治主義や党派と安易に手を組むことを良しとせず，美学的保守の態度を貫くポーランの姿が確認されるだろう。その結果，1929 年からおよそ 2 年にわたって――これだけが不和の原因の全てではないが――両者は思想的に対立し，ふたりの友情にも大きな亀裂が刻まれることとなるのである。

ポンジュがポーランへの書簡に同封する形で「記念碑」と題された長詩の原稿を送ったのは，こうした文学の政治参加の問題をめぐってふたりが一触即発の状態にあった頃のことである。亡き父親の墓前で着想され，12 音綴詩句（アレクサンドラン）で書かれたこの詩篇は，字句通りに読むならば，現世における物質の儚さを救済する存在としての墓を謳っている――墓を前に佇む詩人は，そのなかに収められた父の遺骸がうじ虫によって貪られる光景を幻視する。後に残るのは生前の故人とは似ても似つかぬ遺骨だけである。しかし，そうした光景を前にしても詩人は心を痛めはしない。肉体が滅び消え去った結果，故人は墓と一体化し，より完全な姿を獲得したように思われるからだ――「私が命と教訓を授かった父よ / 今やあなたの肉体は完璧なものとなった。〔…〕あなたの遺骨はついに骨壺へと収められた / それらは嫌な顔もせずにこの直方体の箱と一体化する / この純粋な残骸にとって，もはやそこは狭くはない。// 私はあなたの変身に対して再び目を開く / それは――あまりに完璧であるがため――もはや私の心を動かしはしない / それはあなたの滅び去る形についての絶望を私から拭い去り / あなたのかつての肖像画よりも私に興味を抱かせる」[38]。

いっぽう寓意のレベルでは，この詩はひとつの「言葉の力」を謳った作品としても理解されねばならない。墓とそこに潜み遺体を貪る蛆（vers）はここで，対象から肉を剥ぎ取り，霊ないし理念へと変え，そうすることで存在を永遠化する詩句（vers）に重ね合わされていることは明白。詩題もまた示唆的である。

父の亡骸が眠る場所を「墓（tombeau）」と呼ぶ代わりに「記念碑（monument）」と呼んだとしても，物理的な変化が生じるわけではない。しかし，そうした言い換えのなかには私たちの心を動かす何かがある。このような言葉の持つ「昇華（sublimation）」[39] の機能を謳った作品をポーランに送ることで，ポンジュは，自身が批評家から学んだと信じる，言葉が人間の感情や行動を左右する力を持つことを示そうとしたのだと思われる。じじつ，詩篇冒頭にポーランの名を掲げることで，語られていた思想が父アルマンと年上の批評家に大きく負ったものであることをポンジュは強調する――「父よ，あなたは私にこう語った――我が子よ，言葉たちの不合理な悪戯に報復せよ。まずはポーランの下でそれを知る術を学べ。彼らは私たちに奉仕するよりもはるかに私たちを使うものなのだ。この考えから生まれる絶望に抗え，と」[40]。

送られた詩篇を読んだポーランは，ポンジュが「言葉の力」について誤解していると判断したのだろう。「私には言葉の力に似ているような何かがこの世に存在するとは思えない」[41]，そう前置きした上で，彼は 15 歳以上年の離れた友人に向けて次のように語りかける――

> こうした力の理念それ自体が，成り立たない考えではないだろうか？「家」という語が現実の石でできた実在の家であることと同じくらい文字でできた言葉になりうることは明らかである。つまり，ある言語（*un langage*）においては，それは本物の家であり，別の言語や別の慣習（*un autre langage* et d'autres conventions）においては，それは言葉なのだ。してみれば，言葉が事象（あるいは事象について私たちが抱く考え）に影響を与えるという考え，それは，事実を言っているのではなく，単に，ある慣習から別の慣習への移動，ある言語から別の言語への何の前触れもない移行を言っているにすぎないのではあるまいか。（私はこの考えのなかに，我々を飛躍的に解放してくれる非常に重大なものがあると信じている。これは「ジャコブ・カウ」で私が言ったことに背馳していない。その先を行くものなのだ）。[42]

この一節は，ポーランが別の著作でより詳しく語ることになる言語の多相性の問題に接続させなければ，理解不能に思われる。適宜それらを参照しながら[43]，引用部の記述を解きほぐしてみたい――。通常，あらゆる言葉は辞書的な意味だけが問題となる「語」として人々に認識されている。しかし，これは語の持つ一側面にすぎない。ある話者において「語」と捉えられていた「犬」や「家」といった言葉は，別の話者ないし別の文脈においては，話者の思考を反映させ

た「記号（シーニュ）」や「観念（イデ）」に，さらに別の話者においては，特定の実体と結びついた「現実（レエル）」に変わりうる。ポーランが問題とするのは，そのように，ある状態から別の状態へと何の「前触れもなく」，瞬時かつ無作為にその状態を切り替える言語について，話者各人が，それが実際に今どの状態にあるのかを正確に把握し，互いに了解し合う方法は存在するのかということである。そうした指標ないし超越言語は存在しない。すなわち，人間は「語」「観念＝記号」「実体」，この三相の間で揺れ動き続ける言語の多相性を知ったとて，それがもたらす混沌状態から抜け出すことは決してできない，とポーランは結論する。そして言語の内在的な曖昧性から種々の混乱が引き起こされる。「言葉の力」とは，そうした混乱の最たるもののひとつである，と彼は詩人宛の書簡で説いていたのである。他方ポーランによれば，こうした言語のもつ多相性，「それを第一に特徴づけているように思われる魔術的な，ほとんど聖なる性質」[44] は大衆はおろか言語の専門家たちにおいてさえ全く問題とされていない。ゆえにポーランは言語についての彼の洞察を広く知らしめることを革命的行為と結びつける。あまねく人々が彼と同じく言葉の姿を正しく認識したならば，人類は「言葉の力」を始めとする種々の混乱から「飛躍的に解放され」，新たな世界へと足を踏み入れることになるだろう。

縹渺（ひょうびょう）という外ないこうしたポーランの思想を，正しく汲み取ることは，当時のポンジュには不可能であったように思われる。返信を読み，ポーランが「言葉の力」の信奉者であるという自身の認識の正しさを訝しみながらも，続く書簡のなかで彼は次のように返答する——

> 私はあなたほどには（？）事物に対する言葉の力を信じてはいません（やや乱暴に書きますが）。むしろ精神**世界**には言葉（les mots）よりも事物（*des* choses）のほうが遥かに多く存在するのではないか，と感じています——そして，そのことを（事物にとってだけでなく）残念に思っています。しかし，事態は修繕可能です。なぜならば，言葉とは~~詩人の~~人間の（？）ものだからです。そして，そのことがいったん「理解され，行動に移されたならば」，私たちは，あなたがそう書いたように，それから飛躍的に解放されることができるに違いありません。
>
> 要するに，私はこう考えているのです。第一に，言葉のなかにはごく僅かなものしか存在しません，第二に，人間の諸感情に対する言葉の力は実在しているのです（~~大は~~，そして，その帰結として第三に，事物のなかの命名可能な新たな特性を発見するだけで，人間（つまり私たち自身）の感情や気分を変えることができるのです（そうした

ことは人が事物から出発し，真にそれらに思いを巡らせたときに可能になります)。[45]

引用箇所の言葉にはひとつの矛盾が読みとれる。「言葉の力」をポーランほどには「信じていない」と語っているにもかかわらず，なぜ詩人はここで「人間の諸感情に対する言葉の力は実在する」と続けているのか。この矛盾を解消するためには，事物と邂逅した結果，ポンジュのなかで「言葉の力」の再解釈があったと想定すべきと思われる。すなわち当初，詩人はポーランの影響の下，言葉が人間の感情に直接的に影響を与える魔術的な力を持つことを信じていた。しかし事物と出会った結果，彼は，言葉が人間の思考や行動に影響力を持つとすれば，その力とは，語そのものに由来するというよりも，それが指し示す「対象」に起因するものであると捉え直したのではないだろうか[46]。こうした言語認識は，文学の本質とは言語とその美しさ・表現に存するという文学観を暗に否定するものである。しかし他方でそれは，言葉・詩による革命を企図する者たちにとってはまたとない朗報にもなりうる。この認識は，人間の精神や行動を変えるためには，まだ知られていない事物の特性を見つけ出し，それを命名する，すなわち適切に表現するだけで十分であることを意味しているからだ。引用書簡の後半部では明らかに，「言葉による事物の修正」で詳しく語られていた，「事物」と「精神」をつなぐ媒介物としての言語の役割が語り直されている。そして，かかる事物の命名を以て果たされる〈革命〉を仄めかすことで，詩人は批評家の言葉に歩みよろうとする。しかし，ポンジュとポーランが語っている精神の〈革命〉は同一のものを指すように見えて，その実態は大きく異なると言わねばならない。前者においては「言葉の力」からの解放が，後者においては「言葉の力」による事物たちの解放が考えられているのである。

ふたりの間に文学・政治思想の隔絶があることはほどなくポンジュ自身にも察せられることになる。1930年1月のポーラン宛書簡には，「目下，『新フランス評論』誌の存在が精神を遅らせていることについては〔…〕疑念の余地はない」と述べたうえで，ポーランがそうした「『新フランス評論』側の人間，既存の秩序の側の人間になってしまった」[47]として憤慨する詩人の姿が見出される。批評家に「さらば（アディユー）」を告げるために書かれたこの手紙は実際に投函されはしなかった。しかし当該の文章は，当時の詩人がポーランとの交際を断ち，彼と『新フランス評論』誌の敵対勢力であったシュルレアリスム陣営に加わった理由を

推し量らせて余りある。

結　語

ポーランがポンジュ詩学の成立に絶大な影響を果たしたことは今日通説となっている。本稿が考察を試みたのは，両者の間で思想が伝達される際に生じた摩擦とその意味についてであった。すなわちポーランの言葉は，ポンジュのなかでその正しさが盲目的に信じられてはおらず，それとの格闘を通じて思想と詩学が練り上げられた場，虚軸として機能していたと捉えられるべきなのである[48]。必然的に，詩人のポーラン解釈には水に水素が溶け込むかのごとく独自の解釈，誤読が入り込むことになる。かかるポーラン受容の特異な在り様は，本稿が問題とした「言葉の力」の伝達においてとりわけ顕著である。その事情を要すれば，この理念についてのポンジュの解釈を歪ませた要因として，①ポーラン思想の晦冥さ，ならびにそれを伝える行論の屈折，②詩人の生来の言語観およびその下地としての「意味論」の文脈，③詩人の非順応主義とその発展形としての革命思想，④事物という問題系，これらがまず挙げられよう。

ポンジュがポーランの言葉を曲げて受容したことの本質的理由として，さらに，⑤ポーランの見せた相対主義に対する批判の念があったことを指摘しておきたい。当該の問題は，両者間の書簡交換においても最重要のひとつに数えられる 1928 年冬の手紙のなかで詳しく語られている。そこでポンジュはソクラテスやデカルトといった哲学者の名を挙げながら，彼らの著作に一様に検出される懐疑主義の傾向を批判する。すなわち哲学者たちは筋道立てた議論を展開してみせるが，正しさに拘る余り真理を語ることにきわめて謙虚ないし臆病な姿勢を見せている，というのである――

> 批評において，「何ひとつ知ることができないということを除いては，人は何も知り得ない」，「謙虚になろう」といった結論の向こう側へ行った試しはあるでしょうか？ そんな基礎的なことを思い出すだけで十分であると？ たしかに，それは常に忘却され，「哲学者たち」によって数世紀毎に思い起こされてきたことですが。告白しますが，私の精神が真に求めるものは別の場所，あるいは別の場所とまではいかずとも遥か彼方にあるものなのです。[49]

同様の批判をポンジュはポーランに対して差し向ける。批評家のほうでも，事実について具体的な判断を下すことは慎重に回避されている。ただし彼の言説

では，その事実自体が神秘的な語調や文彩の力を借りてより巧妙に隠蔽されている。かかるポーラン言説の構造について，ポンジュは，自身もまたポーラン的な文体ないし語調である「まるで……かのように（comme si ＋直説法半過去）」構文を採用しながら次のように指摘してみせる――

> 最終的に，私はこう問わざるを得ませんでした――こうした［断定や暗示からなる］語調（トン），かかる神秘的な断定は，単なる信仰表明を示すものなのか，それとも，結局は同じことなのですが，~~ひとつの態度~~，修辞的な文彩を示すものなのかと。この点がはっきりしないのです。まるでこう書くことであなたは，幻想と生の条理からなる全く新しい秩序，一言でいえば，道徳あるいは「ポエジー」を提出しないかぎり，いかに微細なものであれ，論理の誤謬を指摘するだけでは不十分であり，さらには煩わしいとさえ捉えているかのようです。そして同時に，いつかそうした生の条理があなたによって明かされることを私たちそしてあなた自身にも信じ込ませようとしているかのようです。もっとも，あなたの著作はまだあなたの思考のネガティヴな部分しか明かしていませんが。
>
> つまり……もしあなたが虚仮や暗示によって己のポジティヴな思考〔…〕の実現を試みないのであれば，もしあなたが断定もしくはそれへの仄めかしに頼って存在を試みないのであれば，――それは名目主義的態度だと申さねばなりません。[50]

ポーランの著作においては，人間精神・理性の犯す種々の誤りが告発され，そうした誤謬から抜け出し正しい認識，高次の真理へと到達すべきであることが幾度も主張されている。しかし，そうした超越的真理，「別の世界」の存在が文彩の力を借りて仄めかされるばかりで，肝心の真理の具体的内容や到達方法がはっきりと示されることはない。引用書簡の記述は，そのように「ネガティヴ」にしか真理を語らないポーランに不満を抱き，彼に代わって「ポジティヴ」にそれらを語るための〈方法〉の探求へと詩人が向かったことを示唆している。「物の味方（parti pris des choses）」と呼ばれる詩学こそが，かかる〈個〉によって捉えられた真理を肯定的に断言するための〈方法〉であったことは論を俟たない。ポンジュ詩学においては，「言葉の力」や「修辞」といった批評家によって否定的に語られたことを歪曲を惧れずに反転させて捉え直すこと，すなわちジャン・ポーランという偉大な知性が示した相対主義を乗り越えるための決断主義（partiprisme）が引き受けられているのである。

註

＊）本稿は筆者の既発表論文「言葉の力，革命の主題をめぐる変奏――詩学「物の味方」の生成におけるポーランの役割について」（『ガリア』第 60 号，大阪大学フランス語フランス文学会，2021 年 3 月，53–62 頁）を大幅に加筆したものである。なお，特に断らないかぎり，ポンジュ作品からの引用は 2 巻本プレイアッド版『全集』（Francis Ponge, *Œuvres complètes*, 2 vol. Édition sour la direction de Bernard Beugnot, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la pléiade », 1999-2002）に依り，各巻をそれぞれを *ŒC* I, *ŒC* II と略記し，頁数とともに出典を示す。引用にあたっては，既訳があるものについてはそれを参照しつつ，筆者が新たに訳出した。

1）*Entretiens de Francis Ponge avec Philippe Sollers*, Paris : Gallimard / Seuil, coll. « Points Essais », 2001, p. 56.

2）« Pas et le saut », *Proêmes*, *ŒC* I, 171.

3）« Introduction au “Parti pris des choses” », *Pratiques d'écriture*, *ŒC* II, 1033-1034.

4）« Entretien avec Francis Ponge », *Cahiers critiques de la littérature*, n° 2, décembre 1976, p. 5.

5）この点については，例えば以下の著作を参照―― Emmanuel Rubio, *Les Philosophies d'André Breton (1924-1941)*, Lausanne : L'Âge d'homme, coll. « Bibliothèque Mélusine », 2009, pp. 94-108.

6）「ポンジュ詩学の虚軸としてのポーランとシュルレアリスム――比喩・イマージュの主題を中心に――」，『ステラ』第 40 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2021 年 12 月，155–176 頁を参照されたい。

7）Jean Paulhan, *Jacob Cow le pirate ou si les mots sont des signes* [Éd. du Sans Pareil, 1921], in *Œuvres complètes*, 5 vol., éd. Bernard Baillaud, Paris : Gallimard, t. II, 2009. 本稿ではこの作品からの引用については *JC* の略号とともに上記全集版の頁数のみを示す。

8）« Entretien de Francis Ponge avec Ghislain Sartoris », dans Serge Koster, *Francis Ponge*, Paris : Henry Veyrier, 1983, p. 96 ; repris in *ŒC* II, 1434-1435.

9）Père Buffier, *Grammaire française sur un Plan nouveau*, 1709 [cité par Jean-Claude Coquet, « Jean Paulhan et le langage », in *Jean Paulhan, le clair et l'obscur : actes du colloque de Cerisy-la-Salle*, Paris : Gallimard, coll. « Les cahiers de la NRF », 1999, p. 169].

10）Arsène Darmesteter, « La Vie des mots étudiée dans leurs significations », Paris : Delagrave, 1887 [cité *idem*].

11）言語活動の基本単位を語と見るのが正確でないことについては，メキシコ詩人オクタビオ・パスもまた以下の書のなかで明快かつ刺激的な説明を与えているので参照されたい――『弓と竪琴』（牛島信明訳），岩波書店「岩波文庫」，2011 年，78–81 頁。

12）Jean Paulhan, « Défaut de langage », *Anthologie de la nouvelle prose française*,

Paris : Kra, 1926, p. 238.

13)「言葉の力とは，セイレンやミノタウロスのごとく，［語と観念という］奇妙な形に互いにはまりこんだ和解し難いふたつの異物の接合から生まれでてくるものなのだ」（ジャン・ポーラン『タルブの花』（野村英夫訳），晶文社，1986 年，113 頁）。

14）本段落に記したポーランの「言葉の力」の解釈は，以下の文献内でトマ・フェレンジが行った議論から多くの示唆を得ている―― Thomas FERENCZI, « Jean Paulhan et le discours politique », *Jean Paulhan le souterrain, Colloque de Cerisy de 1973*, Paris : Union Générale d'Editions, coll. « 10/18 », 1976, pp. 230-232.

15）Gérard FARASSE, *Francis Ponge : vies parallèles*, Nîme : Alchide, coll. « Littérature », 2011, p. 16.

16）« Le jour et la nuit » [lettre de Armand Ponge à Francis Ponge], *Pour une vie de mon père. Tome II, Rétrospective, 1919-1939*, éd. Armande PONGE, Paris : Classiques Garnier, coll. « Études de littérature des XXe et XXIe siècles », 2020, p. 99. 以下，本資料集については，*PV* II と略記し，頁数とともに出典を示す。

17）ポール・ヴァレリー「ブレアルの『意味論』について」，『ヴァレリー・セレクション（上）』（東宏治・松田浩則編訳），平凡社「平凡社ライブラリー」，2005 年，56 頁。

18）ボードレール「理想」詩篇の解釈とりわけ詩篇の書き換えのロジックについて本稿は，阿部良雄がそのポンジュ論で示した説明に多くを負っている――「表象の遅延装置としてのテクスト」，『テクスト――危機の言説』（小林康夫・松浦寿輝共編），東京大学出版会，2000 年，9 -29 頁参照。

19）« Baudelaire (leçon des varitantes) », *Pratiques d'écriture*, *ŒC* II, 1043.

20）ただし，言語の物質性とその意味という考え方は，父アルマンや意味論の専売特許でないことを強調しておきたい。詩人にこの考えを伝えた可能性のある候補者としては，他にも，ルクレティウス，ルソー，コンディヤックそしてマラルメを筆頭とする近代詩人が挙げられる。とくに，文字（アルファベット）の配置・配列を原子のそれと重ね合わせて論じた哲学者ルクレティウスの思想は，ポンジュの「言葉の力」のもうひとつの雛型であると目される。この点については，以下の文献も参照されたい―― Sylvie BALLESTRA-PUECH, *Templa serena : Lucrèce au miroir de Francis Ponge*, Genève, Droz, coll. « Histoire des idées et critique littéraire », 2013, sous-chap. « Sons significatifs », pp. 32-41.

21）1920 年代に発表された著作のなかだけでなく，ポンジュとの書簡のなかでもポーランはしばしば言語の問題について語っている。たとえば以下を参照―― « Jean Paulhan à Francis Ponge », *PV* II, 195 ; « Jean Paulhan à Francis Ponge », *ibid.*, 299.

22）Voir « Première et seconde méditations nocturnes », *Nouveau nouveau recueil, II*, *ŒC* II, 1188.

23）« Hors des significations », *Pratiques d'écriture*, *ŒC* II, 1005.

24）*Ibid.*, 1006.

25）« Notes d'un poème（sur Mallarmé）», *Proêmes*, *ŒC* I, 183.
26）« Rhétorique », *Proêmes*, *ŒC* I, 193.
27）したがって，ポンジュの「修辞」の理念にポーランが与えた影響については一種の歪みを見るべきだと思われる。それはポーランの修辞論や文彩論よりも，それ以外の事柄――「言葉の力」「比喩」「必然」など――を論じた文章から本質的な影響を受けていよう。なお，「必然（nécessaire）」については « Nécessaire, Trois sens », *PV* II, 234 を参照。
28）« Ressources naïves », *Proêmes*, *ŒC* I, 197.
29）« Le galet », *Le Parti pris des choses*, *ŒC* I, 50.
30）「出発する必要はない。あなたを新たな特性で満たし，無数の未聞の特性をあなたに差し出す事物に転移すること，それだけで十分なのだ」（« Introduction au "galet" », *Proêmes*, *ŒC* I, 202）.
31）詩学「物の味方」の持つ倫理的射程については，ミシェル・コローの説明もあわせて参照されたい―― Michel Collot, *Francis Ponge entre mots et choses*, Seyssel : Champ Vallon, coll. « Champ poétique », 1991, pp. 46-50.
32）« De la modification des choses par la parole », *Proêmes*, *ŒC* I, 174.
33）*Idem*.
34）Voir la notice de « De la modification des choses par la parole », *ŒC* I, 967, note n° 2.
35）構文・内容ともに読み易いとはとても言い難い「言葉による事物の修正」については，本稿とは着眼点が異なるが，以下の文献が示す読解もあわせて参照―― Sydney Lévy, *Francis Ponge, De la connaissance en poésie*, Vincennes, Presses Universitaires de Vincennes, coll. « Essais et savoirs », 1999, pp. 29-33.
36）Michel Raimond, *La Crise du roman : des lendemains du Naturalisme aux années vingt*, Paris : José Corti, 1966, pp. 19-20.
37）「30 年代精神」という用語によって筆者が指さんとするのは，1920-30 年代に青春期を迎えた知的青年層が共有していた価値観・精神風土のことである。この点については次の著書を参照―― Jean-Louis Loubet del Bayle, *Les non-conformistes des années 30 : une tentative de renouvellement de la pensée politique française*, Paris : Éd. du Seuil, coll. « XXe siècle », 1969.
38）「記念碑」詩篇の草稿については，ポーラン＝ポンジュ往復書簡集を編纂・校訂したクレール・ボアレットによる翻刻に拠った。Voir Manuscrit de « Le Monument », Jean Paulhan - Francis Ponge, *Correspondance, I (1923-1968)*, éd. Claire Boaretto, Paris : Gallimard, 1986, p. 114（lettre 114, note 2）.
39）« Francis Ponge à Jean Paulhan », *PV* II, 435.
40）Manuscrit de « Le Monument », Paulhan - Ponge, *Correspondance, I 1923-1968*, *op. cit.*, pp. 113-114, note 2.
41）« Jean Paulhan à Francis Ponge », *PV* II, 433.

42）*Idem*.

43）引用部はルネ・エティアンブルがスリジーの学会でその重要性を強調した 31 年に書かれたブロック宛書簡の記述と酷似している―― « Lettres à Jean-Richard Bloch », *La Nouvelle Revue Française*, n° 247, juillet 1973, pp. 1-13（voir aussi *Jean Paulhan le souterrain*, Colloque de Cerisy de 1973, *op. cit.*, pp. 316-318）。引用部の解釈を行うにあたって，さらに以下の一次文献の内容を考量した―― « Lettre aux “Nouveaux Cahiers” sur le pouvoir des mots » [1938], *Œuvres complètes*, t. III, pp. 542-553 ; « D'un langage sacré » [1982（1940）], *ibid.*, t. II, pp. 594-614 ; « Le don des langues » [1967], *ibid.*, t. III, pp. 474-529.

44）« Le don des langues », art. cité, p. 491.

45）« Francis Ponge à Jean Paulhan », *PV* II, 434. 本書簡については，ポーランに実際に送られた清書の写し・下書きの方を底本として訳出した。

46）以下の一次文献でも，ポーランの名を引きながら，言葉の持つ「力」を相対化して捉え直す詩人の姿が観察される―― « Prologue de la nature des choses », *Pages d'atelier : 1917-1982*, éd. Bernard Beugnot, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », 2005, pp. 94-96. ポンジュがここで行っている「言葉の力」の相対化は，社会学者ピエール・ブルデューがその著作のひとつでオースティンに代表される発話行為論を批判するために提出した考えと酷似している（voir Thomas Ferenczi, « Du bon usage de la langue de bois », *Jean Paulhan, le clair et l'obscur, op. cit.*, pp. 296-297）。

47）« Francis Ponge à Jean Paulhan », *PV* II, 451.

48）以下の一節も考慮されたい――「あなたが問題となるとき，何よりもあなたを判断しようとするとき，私は十分に（賞賛あるいは注意から）自由な精神を持ったことは一度もありませんでした。そして，私はいつも――ときにそれは私にとって困難でしたが――我が意に反してでも，あなたに首尾よく正しさを与えてきました」（« J'ai toujours […] réussi à te donner *raisons*, fût-ce contre moi. » [« Francis Ponge à Jean Paulhan ». *PV* II, 493）。

49）« Francis Ponge à Jean Paulhan », *PV* II, 407. 本書簡については，ポーランに実際に送られた清書の写し・下書きの方を元に訳出した。

50）*PV* II, 408.